

---

# 黒い衝動-Black Impulse-

如月乙姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒い衝動 - Black Impulse -

### 【Nコード】

N5362D

### 【作者名】

如月乙姫

### 【あらすじ】

FBIに組織のスパイが……？謎の構成員シャンゼリゼの正体とは……？

## FILE・0 (前書き)

組織のボスはジンの設定です。

## FILE・0

杯戸中央病院

彼女は眠っている水無玲奈を見つめる。

「キール…」

暗号名を呟いて赤い口紅が飾る唇に妖しげな笑みを浮かべた。

FBI…に身を置く奴らのスパイ。

暗号名シャンゼリゼ。

「終わらせましょうか？ 赤井秀一…いや、シルバーブレット…」

彼女は一層妖しく微笑んでキールの部屋を後にした。

（分かってはいたが…）

屋上で男は煙草を吸っていた。

（黒い狼の本性を暴くチャンスか…何くわぬ顔でFBIを装っている…あの女狼の本性を）

男はニヤリと笑った。

## FILE・1

黒いポルシェ356Aが街中を走っていた。

「兄貴」

運転席の男…ウオツカが兄貴分のジンに話しかけた。

「キールの件は大丈夫ですかい??」

ジンはフツと笑った。

「ああ…当てがついた」

「感謝してよね…」

後部座席のベルモットが言う。

「そうだったな」

ジンは煙草を吸いながら答えた。

「杯戸中央病院」

「そこがどうかしたんですかい??」

「キールはその第4病棟の307号室にいる」

ベルモットとウオツカは驚いた。

「そんな情報どこから??」

「……シャンゼリゼ…奴からの情報だ」

「シャンゼリゼ??」

（そんな構成員いたか??）

ウオツカは思った。

「私もコードネームだけしか知らないわ」

「俺も数回会っただけだが…テメエと同じ”あの方のお気に入り”

だ…謎の多い女だな」

ジンは言う。

「ふゝん…女なの…初めて訊いたわ」

356Aは杯戸町に入った。

それと同時に…

杯戸中央病院の一室にFBI捜査官達が集まっていた。

「水無玲奈が目覚ましたぞ」

秀一の報告だった。

そして、秀一はある話をした。

「本当なのかね…水無玲奈がCIAだと言つのは」

「ええ…本人にも確かめましたしね…」

ジェームズの問いに秀一は答えた。

「驚いたわね」

ジョディは言った。

「とにかく水無玲奈が目覚ました奴らはいつきてもおかしくない警戒を怠ってはいかん」

ジェームズは指示を飛ばし

「はい!!」

捜査官達は返事をした。

ピピピピピ…ピピピピピ…

ジンの携帯がなった。

「俺だ」

ジンは数分話した後、携帯を切った。

「シャンゼリゼからだ…キールの正体分かったぞ」

「キールの正体??」

ベルモットが訊いた。

「ああ…CIAだ」

「キールも入り込んでた鼠だったんですかい!？」

ウォッカが驚いたような声で言った。

「そのようだな」

ジンはフツと笑った。

そう…

FBI捜査官の中の誰かがシャンゼリゼなのだ。

## FILE・2

「ええ！？…奴らは私の正体に感付いてる！？」

玲奈は声を上げた。

「ああ…戻れば殺されるだろうな」

秀一の情報は正しい。

「分かったわ…FBIに協力します」

「ありがとう…そのかわり君の事はFBIが守ろう」

ジエームズは言った。

「それが賢明だろう…奴らは動いている」

秀一が意味深なことを言った。

「動いてる??」

玲奈が訊いた。

「ああ…実はな…」

「酒井陵弥ですかい??」

「ああ…奴を殺「ばら」す」

酒井陵弥とは犯罪者撲滅を唱っている参議院議員だ。

ジンは答えた。

「明日19時…奴は東都プリンスホテル12階のレストランに現れる…そこが奴の死に場所だ」

そして、暗殺当日。

18時…ジンは地図を広げている。

「キャンティはここ…コルンはここ…ベルモットはターゲットを見張っている」

30分前には全員、配置につく。

FBIも待機していた。

「秀一「しゅう」は??」

「そういえば…」

いつものごとく秀一は消えた。

「それより、スナイパー達の居場所だよ」

コナンは言った。

「あの二つのビルの屋上だよ」

ジヨディとコナンは右のビルの屋上へ行く。

「無理しちゃダメよ」

「18時59分」

…3…2…1…

「そこまでよ!!」

「誰だい!？」

キャンティは振り返った。

ジンの元に報告がきた。

どうしたの??ターゲットは生きてるわ??

「どうした…キャンティ、コルン」

FBIの女がアタイの邪魔をしてんだよ

赤井…狙ってる…

二人とも邪魔が入ったらしい。

「キャンティ、コルン、ベルモットずらかるぞ!!」

キャンティはライフルをジヨディに向けた。

ライフルを乱射し、出入口をがら空にした。

階段を駆け下りるキャンティの目にドラム缶が写った。

(時間稼ぎにしかないと思うけど)

キャンティは振り返ってドラム缶を撃った。

バンッ!!バンッ!!

「今の銃声よね」



ジョディとコナンは止まった。

3階と2階の間の階段は火の海だった。

「ドラム缶を撃ったみたいだね」

コナンは言った。

二人はとりあえず屋上へ戻った。

### FILE・3

二時間後ビルから出てきたジヨディとコナンは事の次第をジェームズに話した。

「そうか…二人とも無事で良かった」

「ところで…秀一「しゅう」は??」

「赤井君なら電話があつて行つてしまつたが…」  
ジヨディは奇妙な顔をした。

秀一は倉庫のようなところにいた。

その倉庫から数メートル離れたビルの屋上からキャンティがスコップを覗いていた。

「捉えた!! 赤井…来たみたいだね…中に入ったよ」

後はずらかれキャンティ

「赤井を殺「や」んないのかい!?!」

殺「ばら」す…手は打つてある

ジンの言葉にキャンティはずらかる事にした。

秀一はこの倉庫が組織と関係あるという情報を手に入れて訪れた。  
(何も残っていないか)

秀一が倉庫から出ようとした時だ…

カチカチカチカチカチカチ…

秀一は何かに気付いた。

ドカ~~~~ン!!!!!!

凄まじい音と共に倉庫が爆発した。

「組織に關係ある倉庫が爆発した!?!」

ジヨディはすぐに向かうと言って電話を切った。

ジヨディ達がついた時には火が消えていた。

「あれ！！赤井さんの車じゃない??」

コナンの指の先には黒いシボレーがあった。

「警察に話を訊いたけど爆発が酷くて人がいたかどうか分からないみたい」

「そうか…いや、ありがとうコナン君」

ジェームズは言った。

ピピピピピ…

「すみません」

ジヨディの携帯だった。

ジヨディは二人から離れて電話に出た。

「もしもし」

どうだ…シャンゼリゼ

「爆発が酷くて人がいたかどうか分からないみたいなの」

赤井は死んだ…それで片付けるシャンゼリゼ

「分かったわ…ジン」

電話を切った。

そう…

シャンゼリゼは彼女…

ジヨディ・スターリングだった。

「どうだったの??」

ベルモットは訊いた。

「爆発が酷くて人がいたかどうか分からねえらしい」

「じゃあ、赤井は生きてるかもしれないっていうのかい??」

キャンティはジンに詰め寄った。

「やっぱりアタイが殺るのが確実だったんだよ」

キャンティは言った。

「赤井は死んだ…もし生きてたとしてもシャンゼリゼが始末する」

「アタイはそのシャンゼリゼに会ってみたいよ  
キャンティは言った。

「私も会ってみたいわね」

「俺も…」

ベルモット、コルンまでそんな事を言い出した。

## FILE・4

カツ…

キャンティ達は振り返った。

「アンタはFBI…！！あの時はよくもアタイの邪魔をしてくれたねえー！！」

キャンティとコルンが即座にライフルを構える。

「馬鹿な女「アマ」ですねえ兄貴」

ウオツカはジンに言った。

「こんなところに一人で乗り込んで来るなんて”殺してください”  
って言ってるようなもんだよ」

キャンティが言った。

「やめろ…キャンティ、コルン」

ジンがそう言うのと他の四人は驚いた。

「こいつ…FBI…殺す」

コルンが言うのとキャンティが続けて言った。

「コルンの言う通りだよ」

「あ、兄貴！？」

ウオツカも困惑している。

「…こいつだ」

ジンが何を言ってるのか分からない。

「こいつがシャンゼリゼだ」

「なんですってー！！」

ベルモットは驚いた。

「赤井秀一は死んだわ」

シャンゼリゼが口を開いた。

「倉庫の中から焼死体が発見されたのよ」

「それが赤井じゃねえのかってか??」

シャンゼリゼは微笑んだ。

「損傷が酷くて確認は出来なかったけど…おそらくはね」

秀一は目を覚ました。

(…ここは何処だ??)

「目を覚ました…?? 赤井さん」

秀一は声のした方に顔を向けた。

声の主はコナンだった。

「…坊やか」

扉が開いてジエームズが入って来た。

「大丈夫かね?? 赤井君」

「ええ…なんとか」

「ジョディは??」

秀一が尋ねると…

「僕、訊いたんだ…ジョディ先生が”分かったわ…ジン”って言うのを…」

秀一はフツと笑った。

「やはり…」

ジエームズは驚いた。

「やはりって事は知っていたのかね??」

「確証はなかったんですがね…」

(やはり…ジョディが黒い狼だったか)

秀一は密かに思った。

「ジョディに私の事は…」

「話してないよ」

コナンが答えた。

「そうか…」

「話すつもりもないよ」

秀一はコナンを見た。

「だ、だが…ジョディ君がまさか…」

ジエームズはジョディが奴らの仲間だと言っのを信じられないでい

る。

秀一とコナンは気付いた。

この病室の前にジヨディがいる事を……

## FILE・5

（話し声はさすがに聴こえなかったけど…死んでなかったのね秀一「しゅう」…）

ジョディは思った。

ジョディは屋上でジンに電話した。

やはり生きていたか

「まるで知ってたような口ぶりね」

そうか…とにかく赤井を殺「ばら」せ

「了解」

ジョディは短く返事をした。

その夜、ジョディ…いや、シャンゼリゼは秀一の部屋に向かった。

（シルバードレット…今度こそ死んでもらうわよ）

ゆっくり扉を開け、ベッドに近づく。

カーテンを開け、銃を構えた。

（いない！？）

「やはり来たか…ジョディ」

後ろから聴こえた声にシャンゼリゼは驚き振り返った。

「秀一「しゅう」」

シャンゼリゼは笑みを浮かべ秀一に近づいた。

「近寄らない方がいいと思うが」

「どうして??」

秀一はニヤリと笑った。

「黒い狼さん」

シャンゼリゼは驚いた。

「黒い狼って…どう言う事なの??」

「とばけるな…お前が奴らの仲間だと言う事は分かっている…ジョディ」



シャンゼリゼは押し黙る。

「どうして分かったの??」

シャンゼリゼは精一杯、虚勢を張った。

「組織にいる人間は組織の匂いがするからな」

秀一はニヤリと笑って言う。

「組織の匂いは消せないからな」

シャンゼリゼは驚いた。

(どうやって逃げよう)

「ジョディ…いや、お前のコードネームは??」

シャンゼリゼは秀一を睨み付けた。

「お前が使ってたサンテミリオンか??ワインの一種だからな」

「違うわ…私のコードネームは………シャンゼリゼよ」

秀一はジョディのコードネームを知った。

「シャンゼリゼか」

(カクテルのコードネームか)

シャンゼリゼは少しずつ足を動かして扉に向かおうとしている。

「どうやって逃げる…シャンゼリゼ」

シャンゼリゼは笑みを溢した。

「どうやって逃げましょうね」

…その時

ドカ~~~~ン!!!!!!

病院の倉庫が爆発した。

(…っ!?)

秀一が窓の外から見えた爆発に気を取られた一瞬でシャンゼリゼは姿を消した。

## FILE・6

秀一はため息を吐きながらベッドに座った。

（逃がしたか…）

バンッ！！

勢いよく扉が開きジエイムズが入ってきた。

「大丈夫かね！！」

「ええ… ジョディには逃げられてしまいましたが」

秀一はジョディの事をジエイムズに伝えた。

「シャンゼリゼか…」

「分かったのはこれだけです」

「いや… ありがとう赤井君… それにしても…」

ジエイムズが何か考えていると秀一が声をかけた。

「ボス… さっきの爆発の原因は??」

「爆弾が仕掛けられてたようだ」

秀一は頷いた。

「やはり… 私から注意を反らす為にジョディが仕掛けたんでしょう」

秀一は外を見た。

「ジョディも奴らと落ち合った頃でしょう」

「ジョディ君が奴らのスパイだったとは考えもしなかったよ」

「私ですよ」

秀一は外を見ていた。

ハア… ハア…

暗闇に荒い息遣いが響いていた。

「シャンゼリゼ」

「……ジ……ン……」

シャンゼリゼはジンにちかづいた。

「赤井を… 奴を殺「ばら」せたか??」

「ごめんなさい…失敗したわ」

シャンゼリゼはジンに話した。

「お前の正体がFBIにバレたのか」

「そうみたいね…秀一」「しゅう」は分かってたみたいだけど  
シャンゼリゼはふと思った。

（私はどうなるの??）

「まあいい…後は別の策を考える」

ジンは低い声で言った。

「お前は本部に戻れ」

「了解」

シャンゼリゼは車に乗って本部に向かった。

シャンゼリゼは考えた。

（ジンはどうやってシルバートレットを殺す気なの??）

秀一はただでさえ鼻が利くのだ。

（こちらの射程距離「レンジ」に引き込めたら楽なんだけど…）  
そんな簡単にいく相手ではない。

シャンゼリゼは先の事を考えながらアクセルを踏み込んだ。

## FILE・7

本部に戻るとベルモットの優雅な微笑みがあった。

「おかえりなさい…シャンゼリゼ」

「ベルモット」

「赤井を殺し損ねたのね」

「ええ…そうよ」

ベルモットのダークレッドの唇が妖しく微笑んだ。

「ウフフ…機密構成員も大した事ないのね」

シャンゼリゼは何も言えなかった。

「それにしても…貴女が組織のスパイだったとは驚いたわね」

「驚く事じゃないわ…両親も組織の人間だったんだから」

シャンゼリゼはそう言うと言き出した。

「20年前に貴女の両親を殺したのは私よ」

ベルモットはシャンゼリゼとすれ違う時に言った。

「知ってるわ」

シャンゼリゼは低い声で振り返る事もなく言った。

シャンゼリゼは自分の部屋に戻ると20年前の事を考えていた。

『20年前に貴女の両親を殺したのは私よ』

ベルモットの告白…

『ジヨディ』

シャンゼリゼの名を優しく呼ぶ両親…

シャンゼリゼはソファアに座り目を閉じた。

20年前の雨が降ってる夜だった。

ジヨディの両親は殺された。

ジヨディが目覚めたのは病院のベッド上だった。

正確には覚えていたが目は瞑っていた。

親切2人の微かな話し声だけが聞こえていた。

「それ本当なの」

「ええ…この子の両親…FBIに目を付けられていたんですって」

「裏で巨大な組織に抹殺されたみたいよ…」

ジョディは驚き大きく瞳を開いてカーテンに映る親切達の影を見つめた。

その夜…ジョディは病院を抜け出した。

家に帰ると両親の仕事の関係上、拳銃が置いてあった場所に行く。

そこからベレッタM1934を取り出し予備の銃弾と金をできるだけ多く持って家を飛び出した。

（これからどこへ行く…）

それから数週間…路地裏やホテルなどで過ごした。

（お金が…）

底をつきはじめていた。

（銃弾は大丈夫…銃も…大丈夫…）

夜になりジョディは路地裏に入って行った。

## FILE・8

「おい…そのガキ」

振り返ると黒い少年がそこに立っていた。  
長い銀髪が美しい少年だった。

「誰…??」

ジヨディは訊いた。

「お前には関係ねえ…どうせ死ぬんだからな」  
少年は銃を構えた。

（このままじゃ殺される）

ジヨディはそう思い銃を構えた。

「お前に撃てるのか??」

少年は冷酷に微笑んだ。

「撃てるわ」

バンッ！！バンッ！！

ジヨディも少年も引金を引いた。

ジヨディは壁に隠れてかわし連射した。

ガキンッ！！

（銃弾が…！！）

「なくなつたみてえだな」

少年はすぐ近くにいた。

「……っ…!？」

少年はジヨディの腕を掴み、擦った。

「痛い！！！！！！」

ジヨディは銃を落として金切り声を出した。

「大丈夫だ…もう少して痛みも感じなくなる」

少年はジヨディの額に銃口を当てた。

（殺されてたまるか！！）

ジヨディは少年の顔を睨み付けた。

少年は驚いた。

少年は腕を離した。

「やるじゃねえか…一発でも俺を弾が擦るなんてな」

ジヨディは驚いた。

暗くて分からなかったが少年の右腕が裂け血が出ていた。

「お前の名は??」

「…ジヨディ・スターリングよ」

少年はニヤリと笑った。

「俺はジンだ」

「……ジン…??」

「そうだ…まあ暗号名だがな」

「暗号名??」

ジンはジヨディを見た。

「お前の暗号名はシャンゼリゼだ」

ジヨディはジンを見た。

「シャンゼリゼ…」

「そうだ…一緒に来るか??シャンゼリゼ」

ジヨディは頷いた。

この日からジヨディは組織の機密構成員になった。

もし…あの時『行かない』と答えていたら間違いなくジンに殺されていた。

シャンゼリゼとして生きなければ死んでいた。

生きられなかった。

（私は迷わない…どんな運命があっても…）

コンコン…

ノックの音でシャンゼリゼは目を覚ました。

（眠っていたのね）

「誰??」

「私よ」

扉の向こうから聞こえたのはベルモットの声だった。



FILE・9

シャンゼリゼはベルモットを部屋に入れた。

「ジンの伝言よ…赤井を殺せなかった事は音沙汰なしですって」  
ベルモットはソファ―に座り煙草に火を付けながら言った。

「そう…ありがとう」

シャンゼリゼは紅茶を入れてテーブルに運ぶ。

「…もう後はないわね」

シャンゼリゼは呟いた。

（（ジンが任務の失敗を許すのは一度だけ…））

シャンゼリゼとベルモットは同時に思った。

「私はそろそろ部屋に戻るわ」

「ええ…じゃあまた」

ベルモットは出て行った。

シャンゼリゼが逃げて約9時間が経過した。

（さすがだな）

「やはり見つからないようだ」

ジエームズの声に秀一は振り返った。

「そのようですね」

（我々「FBI」の構成人数や何やらを知ってるジヨディをこのままにするわけにもいかないが…）

秀一はまた外を見た。

（拠点に直接乗り込んでボスを暴き、潰せば手っ取り早いんだが）  
秀一は憎むべき宿敵の顔を思い浮かべていた。

秀一は思い出す。

「……………君……………大君!!」

諸星大こと赤井秀一は女の声で我に返った。

「すまない…考え事をしていたから」

秀一が言うと女は笑いながら言った。

「大君らしい」

女：宮野明美は悪戯っぽく笑った。

「どーせ仕事の事を考えてたんでしょ」

「いや…」

秀一は言葉を濁した。

「いいよ」

明美は笑った。

（言わなければ）

秀一は考え、口を開いた。

「明美…話があるんだ」

「何??」

明美は秀一を見た。

「実は…俺はFBIだ」

秀一は順々に話した。

FBI「スパイ」だという事、明美を利用してた事、ジンとの取引をする事。

「大君がFBI!?!?」冗談ならもつとましな冗談…言ってよね!!」

明美の表情を見た秀一は気付いた。

「お前…知っていたな!!?!?なぜ俺から離れなかった!!?!?お前を利用していたんだぞ!!?!?」

明美は涙目になりながら秀一を見た。

「言わなきゃ分からない??? 大君の事、好きだからだよ」

秀一は驚いた。

「ねえ…ひとつだけ教えてくれる??」

「何だ??」

明美は秀一を見つめる。

「大君の本名」

秀一は迷ったが、口を開いた。

「赤井秀一」

「秀一君か…こっちの方が貴方らしいよ」

そして、その数日後ジンとの取り引きをする事になった。

ピピピピピ…ピピピピピ…

秀一の携帯がなった。

秀一君…今日だよ…頑張ってね

「ああ…だが、俺がFBIだしたバレたら…」

その先は言わないで…覚悟は出来てるから…

秀一は何も言えなかった。

生きて帰って来てね

「分かった」

秀一はジンとの取り引きに挑み、組織に感付かれてしまった。

(明美…約束は守れそうにない)

生きる事は出来た。

帰る事が出来なかった。

秀一の頭にあつたのは組織に反感を持っていた明美の事だった。

それから二年たった頃、明美に任務が来た。

『十億円を強奪しろ』

これが命令だ。

明美は秀一にメールを打つ。

もし、妹と組織を抜けられたら今度は本当に付き合ってくださいか??

明美は決心した。

明美は任務を実行し、成功した。

「よお…宮野明美」

ジンが低い声で言った。

「お前は妹と違って組織に必要なえんだ」

ジンは銃を構えた。

明美は分かっていた。

（ごめんね…秀一君）

バンッ！！

弾は明美の肺を貫通していた。

ジンは銃を投げ捨てるとそこから消えた。

明美は口から血を吐きながら呟いた。

「……志…保……………秀一…君……………」

（どうか生きて組織を壊滅に導いて…こんな組織は世界に必要ない）

明美は殺された。

それを知った志保は組織を脱走し、秀一は組織への憎しみを深くした。

FILE・11

それから数ヶ月、秀一はジンを殺す事を目的に組織を追った。

（奴を殺さないと死ねないからな）

秀一にとってジンは恨むべき恋人の敵だ。

「赤井君…大丈夫かね?？」

ジェームズが声をかけた。

「大丈夫ですよ」

秀一は外を見て不敵に笑った。

「シャンゼリゼ」

その声でシャンゼリゼは振り返った。

「あら…ジン」

ジンは念押しするように言った。

「今度こそ赤井をあの世に送るぞ」

「分かってるわ」

ジンは笑った。

「容易くは行かねえと思うがな」

シャンゼリゼはジンを見た。

「まあ…やるだけやってみるわ」

シャンゼリゼとジンはすれ違った。

「抜かるなよ…シャンゼリゼ」

「ええ」

シャンゼリゼは部屋の方へ行った。

「奴は人一倍鼻が効くからな」

ジンは思う。

（今度こそテメエをあの世に送ってやるよ…赤井）

ジンは不敵に笑った。

同じ頃、F B Iにある人物から連絡が入る。

ある人物とはC I Aの本堂瑛海だった。

本堂瑛海です…水無玲奈と言った方が分かりますけど…  
その電話に出たのはジェイムズだ。

「どうかしたのかね??」

瑛海はアメリカのC I A本部にいた。

彼らの居場所について情報が入ったのでF B Iにも連絡した方が  
いいと思ひまして…

瑛海は順々に話した。

彼らは東都市内にあるビルを本拠地に行っているようです

「本当かね??」

ジェイムズは驚く。

ええ…私も使っていましたし…そこを叩けばボスまで行けると思  
います

「そうか…ありがとう、玲奈君」

ジェイムズは電話を切った。

「みんな…集まってくれ」

集まると話した。

「本当ですか??」

秀一は信憑性を疑っていたのだ。

「本当だ…水無玲奈、彼女からの情報だ」

秀一は納得した。

（彼女からの情報ならデマって事はないだろう）

「組織の本拠地に踏み込みますか??」

捜査官の一人がジェイムズに聴いた。

「その事なんだが…私は下手に動いて彼らに感付かれるよりは…」

「私は踏み込んだ方がいいと思いますが」

ジェイムズの台詞を秀一が遮った。

「あ、赤井君」

「奴らは感付けば霧のように消え失せる…そうなる前に拠点に踏み込み取り押さえてしまった方が良策だと私は思いますがね」

秀一の言葉でジェイムズは考えた。

「赤井君…君の判断を信じよう」

ジェイムズは声を張った。

「彼らの拠点に踏み込み、一人残らず取り押さえよう…作戦実行は三日後だ」

「…はい!!」

捜査官達は返事をしてそれぞれ配置に戻った。

「赤井君」

ジェイムズは秀一を呼び止めた。

「なんですか??」

「作戦は三日後だ…それまでゆっくり休みなさい」

ジェイムズが優しい口調で秀一に言った。

「ありがとうございます」

秀一はそう言うのと部屋から出て行った。

（ウフフ…FBIは私たちの拠点を特定したようね）  
ベルモットは密かに思った。

「どうした、ベルモット」

「何でも無いわ」

ジンの質問を流した。

「私…戻るわ」

ジンの部屋を出た。

（シルバールレット…私たちの心臓を射抜く唯一の武器）

ベルモットは不敵な笑みを溢している。

（シャンゼリゼ…貴女はどうするの？…彼らは乗り込んで来るわよ）

自分の部屋に着くとソファ―に座り、煙草に火をつける。

（さあ…赤井秀一…組織の心臓を射抜いてちょうだい…そして…）

ベルモットはそこまで考えてやめた。

ここから先はジンに感付かれれば今までの巧妙な作戦が崩れてしまう。

ベルモットは不敵な笑みを溢し続けた。



## FILE・13

そして、三日後。

「作戦を開始する」

ジエームズは組織の拠点を見つめた。

「FBIの奴ら…展開し始めやした」  
ウォッカがジンに報告した。

「キャンテイ、コルン行け」

「あいよ」

「……分かった……」

キャンテイとコルンはライフルを持って出て行った。

「フツ…後はFBI「ハエども」がどう飛ぶかだ」

「FBIだ」

ジエームズたちは銃を構えて乗り込んだ。

その声で銃を置いた構成員もいた。

「とりあえず、幹部を潰すんだ」

ジエームズは指示を出した。

（幹部連中はまだか）

秀一は思った。

「幹部連中を潰せば組織は崩れる」

秀一は言った。

奥へ進んでも幹部連中はいない。

（おかしい…）

秀一は思った。

その時だった。

カッン…

靴音が静かに響いた。

FBIの行く手がある女が遮った。

「やっぱり来たのね…」

その女は言った。

「ジョディ君!?!」

ジェームズは驚いた。

「シャンゼリゼ…ボスの元に案内してもらおうか」

秀一は低い声で言い、銃を構えた。

「断わるわ」

シャンゼリゼも銃を構えた。

「なら…仕方ない」

秀一は三発発砲した。

その弾はシャンゼリゼの右腕、右肩を貫通し、右脇腹を擦った。

シャンゼリゼは崩れ落ちる。

「何故、避けなかった?」

秀一の声は震えている。

「お前なら避けられたはずだろう、ジョディ!!」

秀一は倒れたシャンゼリゼを抱き起こした。

「わざ…と…避け…なかった…のよ」

シャンゼリゼ…否、ジョディは出血が酷いためか息も絶え絶え言った。

「ボス…は…ジン…秀一「シユウ」…お願い…奴らを…」

ジョディから力が抜けた。

「ジョディ君!?!」

ジェームズが叫ぶ。

「大丈夫ですよ…多量の出血で気を失っただけでしょう」

秀一はジョディを抱き上げ、捜査官の一人に渡した。

「救急車を呼んで病院に連れて行け」

「了解」

秀一は奥を見つめた。

「行きましょう」

「赤井君、ジヨディ君の情報だが…ジンが組織のボスと言うのは」

秀一はジェームズを見た。

「ジンがボスと言うのは多分事実でしょう」

（貴様がボスだったとは…嬉しいよ、宿敵「こいびと」さん）

「キャキャキャキャ…来たねえ」

キャンティはスコープを覗きながら言った。

「アタイが赤井を狙うよ」

俺も…赤井…撃ちたい

「好きにしな」

秀一に狙いを定めた。

（ん??…なんだ??）

秀一は気配を感じた。

「赤井君??」

「スナイパーが狙っているようです」

秀一はライフルを取り出して目を光らせた。

（二人か…）

「やっとお出ましか」

秀一はそう言うのとコルンに向かってライフルを構えた。

バンッ…バンッ…

その場に二発の銃声が響き渡った。

「コルン！？…コルン！！！」

キャンティはコルンの返事がない事でコルンが死んだ事を確信した。

「赤井！！殺す！！！」

キャンティはライフルを構え、連射した。

（一人は撃った…もう一人は…）

バンッ…

秀一は弾を避けながら撃った。

それが二、三分続いたが急にピタツと止んだ。

（なんだ…??）

秀一は不審に思った。

キャンティは後ろから肺を撃ち抜かれた。

「ベルモット……アンタ…ジンを…裏切るの…かい！！！」

ベルモットはサイレンサー付きの銃を持っていた。

「ウフフ…そうなるわね…キャンティ」

ベルモットは銃をキャンティの頭に当てた。

「組織は壊滅するわ…壊滅しないといけないの…」

バンッ…

ベルモットは引き金を引いた。

（シャンゼリゼは貴方たちに情報を渡したようね）

ベルモットは小さく見えるFBIを見つめた。

（さあ…ジンを殺せるのは貴方だけよ…赤井秀一）

ベルモットは不敵な笑みを溢した。

FILE・15

「キャンティとコルンが殺られたようですぜ…兄貴」  
ウォツカはジンに報告する。

「そうか…ベルモットとシャンゼリゼは??」

「ベルモットは分かりやせんが…シャンゼリゼは兄貴の目が逸れてるうちにFBIに情報を渡した鼠でした」

ジンは不敵に笑い

「そうか」

と、言った。

「ジンはこの先にいるようですね」

秀一は壁に隠れながら、ジエームズらと話していた。

「ここまでだ…FBI」

ふいに声が聴こえた。

「ウォツカ」

秀一は銃を構えた。

バンツ…バンツ…バンツ…

何発もの銃声が響く。

「赤井、テメエは死ぬんだよ…ここだな」

ウォツカが弾を避ける秀一を完璧に狙いを定めた。

「赤井君!!!!!!」

ジエームズが叫び、数人の捜査官が銃を構えた。

「ここからでは撃つな!!! 赤井君に当たるかもしれない!!!」

ウォツカは笑った。

「終りだな、赤井!!!!!!」

ウォツカは引き金を引いた。

バンツ…

一発の銃声が響く。

だか、その銃声はウオッカが放ったものでも、秀一が放ったものでもなかった。

ドサ…

ウオッカは胸から血を流し倒れた。

「無事かしら… 赤井秀一」

ベルモットだった。

「どう言う事だ??」

秀一はベルモットに尋ねる。

「個人的に貴方たちを助けただけよ」

ベルモットはFBIに近いた。

「ジンはそこにはいないわよ… 私が案内するわ」

そう言うときベルモットは歩き出した。

しばらく歩き

「ここよ」

と、言つて止まる。

「私はまだやる事があるから…それが終わったら介入するわ」

ベルモットは立ち去った。

FBIは全員、銃を構えた。

「まずは私が一人で行きます」

秀一はそう言うとき扉を開けた。

ダン!!

「FBIだ」

秀一の声にジンはゆっくり振り返った。

「良く辿り着いたなあ… 赤井… クッククッ」

ジンは不敵に笑った。

FILE・16

「赤井… テメエはもう必要ねえんだ」

「必要なのは貴様の方だろ??」

ジンは秀一を睨む。

「何だと」

秀一は笑みを溢した。

「沢山の人々を殺した罪… 死んでもらうぞ、ジン」

秀一とジンは連射した。

だが、どちらの弾も当たらない。

バンッ…

(……っ…!!)

カチャ…

ジンの弾が秀一の左腕を擦り、秀一は銃を落とした。

「これで終わりだ!! 赤井!!!!」

ジンは引き金を引いた。

バンッ…

赤い血が飛び散った。

長い金髪がバラけた。

秀一は目の前に飛び込んで来た女に驚いた。

「ベルモット!?!」

ジンは驚き声をあげた。

秀一はジンの気が逸れた時に銃を拾い、瞬時に三発発砲した。

「……くっ…!!」

弾はジンの左肩と左右の太股を貫通した。

ジンは崩れ込む。

「もう逃げられないぞ… ジン!!」

秀一はジンの額に銃口を当てた。

「さよならだ… ジン」

パンツ…

秀一は引き金を引いた。

ボスであるジンが死亡した事で組織は壊滅した。

主要構成員のほとんどは死亡し、怪我をしたジヨディとベルモットは退院し次第、FBIに拘束された。

二人とも取り調べで組織について全て話した。

「赤井君…」

ジエイムズが秀一に話しかけた。

「あの二人は罪に問わない事にしたようだ…」

「ええ…ジヨディにはFBIに戻って貰って、ベルモットには女優として表舞台に立って貰います」

秀一は笑った。

「当分、我々の監視下に置かれるでしょうが…あの二人なら大丈夫でしょう」

「クツクツクツ…赤井…」

男は独特の低い声で呟く。

全身黒の男。

「今度こそテメエを地獄に送ってやるよ」

そう言ったのは死んだはずのあの男だった。

ジンは遠くに見えるFBIの本部を見つめ不敵に笑っていた。



FILE・16 (後書き)

最後まで読んでくださった方、ありがとうございました。 続編  
があるような終わり方でしたが、今のところ予定はありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5362d/>

---

黒い衝動-Black Impulse-

2010年10月11日13時26分発行